

中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1377号 令和3年2月15日

2月号 / 大日本生産党結党90周年記念全国大会 特別号

大日本生産党結党90周年記念全国大会開催さる	1
中国共産党が終焉に近づいた	3
香港を沈没させるイギリスの政策	4
中国の座を狙うインドのしたたかな戦略	5
東大阪市下の、ある中学校教育現場から〈12〉	6
寄稿 子どもを育てること.....「兵庫通信」代表 村上 学.....	6



1月24日 唐津市

本 社 〒847-0871 佐賀県唐津市東大島町 19-5
090-3199-8446 no.shin.7771008@gmail.com
賛助購読料 年額 3,000円（年10回発行）
ホームページ [http:// 大日本生産党.com/](http://大日本生産党.com/)

発 行 所
中 央 情 報 通 信 社
編集長／谷 田 透

恐縮ながら3月の発行はお休み致します

大日本生産党結党九十周年記念全国大会 開催さる

一月二十四日（日）、佐賀県唐津市役所にほど近い大口センタービルへ、約二〇名の代議員が集結したのは正午過ぎ。新型コロナウイルスが猛威を奮い、且つ新幹線博多駅からさらに一時間半を要する唐津市での開催とあって、東京方面からの出席が見合わせられたのは残念であった。そのような悪条件下ではあったが、昭和六年に大日本生産党が結党されてより九十年という歴史的節目を迎え、これを記念する全国大会は開催されたのである。

午後一時、会場正面の国旗を通して、野崎伸也司会者の先導で国民儀礼、さらに党旗を通して物故先覚同志に対する黙祷を捧げた。ひきつづき大会宣言を、別宮宗次郎君が力強く朗読する（写真左）。

大会宣言

党祖内田良平先生が、我が大日本生産党を昭和六年六月二十八日、大阪中之島公会堂で結成されて以来、本年で満九十年を数える。

党祖は、昭和大恐慌による国民生活窮乏、英米による軍縮攻勢、赤化ロシアによる思想侵略という未曾有の国難の中、我が国悠久の国体に基づいた国家社会の革新、即ち維新を、立憲政治の許に断行する目的を持った組織として、本党を結成された。

思えば我らが打倒の対象とした「戦後体制」は、綻びを修理しつつではあるものの、昭和・平成・令和と既に七十六年を生き延び、いまや九〇%以上の国民がそれを当然のものと認識するに至っている。その間、日本国憲法は一言一句改められることなく、専ら「解釈改憲」によってその場しのぎを繰り返した結果、有りもしない「諸国民の公正と信義」に頼って領土の保全もままならず、歴史認識を理由に国の正史は蹂躪され、あろうことか野党・メディアによる外患誘致とも言うべき国論分断を許している現状である。このままでは我ら是如何なる顔を以て靖国の英霊にまみえることが出来るのか。

昨年初頭から猖獗を極めた、中国に端を発する武漢肺炎は、現在に至るも全世界にはびこり、収束の気配もない。加えて、当初「水際作戦」で際立った対応を見せ徐々に世界中で高評価を受けるに至った我が国の危機管理姿勢が、現在はどうか。

国民に二度目の「緊急事態宣言」を出し死命を懸けた対応を命じておきながら、中韓国に対しては「ビジネス往来」なる泥舟の如き例外措置を認めている。斯様なダブルスタンダードを以て平然としている菅政権に、今後の内政外交を任せておけるとはとても思えない。

さて我が国の現在の人口は一億二、五〇〇万人。二〇一〇年（一億二、八〇〇万）のピークから毎年減少の一途を見せている。内閣府の試算によれば、二十年後二〇四〇年の我が国総人口は八、〇〇〇万人台にまで減少し、そのうち三、〇〇〇万人が六十五歳以上の高齢者になるといふ。勤労世代の悲鳴が聞こえるようだ。

まだしも大都市は人口が多く税収があればこそ街や道路が整備され、清潔で治安も守られている。今後そういった社会インフラは衰退し、都市はスラム街と化す。犯罪が横行しても警察は来ず、夕方以降は町を歩けなくなる。人口の少ない地方は、自治体そのものが成り立たず消滅してしまうかも知れない。そういった近未来の予測を後目に、広大な国土が中国人投資家に売買されているという現状を何と見るべきなのか。

かかる事態にもかかわらず、政府も国会も花見会がどうした等といっ



た低次元な揚げ足取りに終始し、国の将来を決定づける人口問題は無策のままである。結婚や出産を奨励する言説は「セクハラ」扱い。加えてこのような時期に同性婚への法制度や夫婦別姓を主張する野党、一部与党は国家存亡の危機が理解できないのか、或いは第三国の意図が働いているのか。斯くの如く、これまで我が党が論じてきた「危機」とは桁違いの、建国以来未曾有とも言える国難が、目前に迫りつつある。人事を尽くして天命を待つ——我々大日本生産党は、党を挙げて六合の衛りに挺身するとともに、機に応じて為すべき最善の道を党員各々が考え、且つ行動してゆく所存である。

令和三年一月二十四日

大日本生産党結党九十周年記念全国大会 代議員一同

「党首挨拶」では丹野寛親・第七代党首が、「鉄は熱いうちに打て」という諺をひき党員に切磋琢磨を促すと同時に、継承が出来るうちに若い世代に後の体制を委ね、武士道に倣い死ぬ覚悟を以て現代を生き抜くことを求めた。

このあと、阿部一雄総務会長を議長に選出。すみやかに議事に入った。

①党首勇退に関する件（説明者／野崎伸也）

②新党首選任の件（説明者／野崎伸也）

本来党首人事は総務会の決定に拠るべきではあるが、党総務会士の減少、総務会の衰微により開催が叶わぬため、予て副党首に就任した森田淳氏を、第八代党首とすることを満場一致で承認した。伝来の刀剣を授与し、党首継承の儀を経て、新党首の決意表明が行なわれた（写真）。森田新党首は党綱領第一「伝統に基づく天皇国日本の顕現」を挙げ、現在「皇統の護持」が危殆に瀕する事態が様々な形で表われていることから、今後の国民運動の必須を訴えた。

③規約、内規改正の件（同／谷田 透）

④新役員選任の件（同／森田淳新党首）

新党首による新たな執行部の陣容が発表され承認を受けた。

⑤運動方針に関する件

・内政問題（説明者／谷田 透）

新型コロナウイルス問題の現状、聖俗を弁えぬ志操なき世情への世論喚起、深刻な人口減少問題などを説明し、憲法改正・人類の敵中共の策動阻止・外国人による土地所有の抜本的法改正などの必要を捉えた運動方針を提案した。

・外交問題（説明者／佐伯哲也）

アメリカ、中国、朝鮮半島、ロシアの現状と我が国との関連を説明。対中関係が今や開戦前夜の様相を呈しており、早晩国内メディア、反日野党の世論分断工作は避けられない。今後、政府の宥和姿勢を戒め、啓蒙活動に力を注ぐ提案をした。

・国防問題（説明者／森田 淳）

新防衛大綱決定以降の我が国の防衛体制と仮想敵国の情勢を分析し、今後は若い世代へ教育現場における防衛意識の醸成を目的に教育改革を提案すること。加えて自衛官の待遇改善、国防費二％を政府に訴える提案をした。



■新役員

名誉顧問 鴨田 徳一

最高顧問 阿部 右善

顧問

丹野 寛親

阿部 一雄

杉山 清一

堤 一清

党首

森田 淳

副党首

谷田 透

【政治会議】

森田 淳

谷田 透

佐伯 哲也

野崎 伸也

【書記局及び本部役員】

書記長 佐伯 哲也

副書記長 野崎 伸也

幹事長 内藤 芳弘

幹事 山田 誠

幹事 二宮 弘次

機関紙（中央情報通信）

編集長 谷田 透

相談役 元 武尊

藤原 雄

高木 桂三

喜安 幸夫

有馬 樸

武田 博仁

風間 正美

小坪 康信

三浦 正人

【地方事務局役員】

◆関東・東北事務局

事務局長 内藤 芳弘

次長 山田 誠

◆関西事務局

事務局長 谷田 透

◆九州事務局

事務局長 野崎 伸也

議事は熱心な審議がなされ、いずれも原案どおり可決された。
聖寿万歳を岩尾隆雅熊本支部長、生産党万歳を森田淳・新党首の発声により高らかに響かせ、午後三時、すべての大会次第を終了した。

中国共産党が終焉に近づいた

アメリカ新大統領が誕生する直前、ポンペオ国務長官は「中国政府のウイグル人に対する行為はジェノサイドであると認定する」と宣言した。これはアメリカ政府として国務省が公式発表したものであり、その後誕生したバイデン政権でも、正式に「中国政府のウイグル人に対する行為は新政権の国務省としても継続して認定する」と宣言された。

歴史的に見ても、主権国家が別の主権国家を名指しで「ジェノサイド（集団虐殺）政府」と認定することは、我々が想像する以上に大きな意味がある。代表的な例は、ナチスがユダヤ人に対してジェノサイドを行なった事実を欧米先進各国は知りながらも、なかなか政府認定には踏み切れなかったことだけ見ても、「ジェノサイド政府」と名指しされることとがどれほど重大な意味を持つ分かるだろう。

アメリカは中国共産党の習近平政権に對して、ヒトラーにさへも遠慮していた「ジェノサイド政府」という認定を宣言したのである。つまり、中国共産党はナチスよりも悪質であり、習近平はヒトラーよりも凶暴だとレッテルを貼ったのだ。現在のところ、当事者の中共以外にこのアメリカ政府の宣言を批判する者は無く、逆に明確に同調する者も無く、世界は立場をどうするか固唾を飲んで見守っている。



ポンペオの宣言が出される前に、アメリカとロシアの外交当局者の秘密会議が行なわれていたと言われ、その中で、ロシアとトルコに対する経済制裁の解除に向けた「大義名分」を議論したとされている。

中国脅威論というのは、アメリカだけの話だけでなく、中央アジアを踏みつけて我がものにしようとする中共の姿勢を恐れる「歴史的な中央アジアの覇者」であったロシアとトルコが、実はアメリカ以上の怒りを秘めていたのである。

「ウイグル解放」「ウイグル人の人権救済」「ウイグル弾圧者を排除せよ」との合言葉が世界的なものとなれば、世界は中共を国際舞台から追放することになる。多勢に無勢となれば、いくら中共がアフリカや南米などの貧困国家に賄賂をばら撒

いても逆転できるわけも無く、中共解放軍は戦わずに武装解除するのか、同盟軍に完膚なきまでに叩き潰されるかを選ぶことになる。習近平はヒトラーと同様に、歴史に汚名を残して自決するか、ムッソリーニと同様に、民衆に引きずり出されて殺されるかを選ぶことになる。

ロシアとトルコは握手することに決まったそう
で、両国が世界代表として「ウイグル解放戦線」を構築して中共に対抗するようだ。これでウイグル解放と中央アジアの安定は保証され、そうなればイランも革命防衛隊を抑制して安定する。するとサウジもアラブに呼びかけて、イスラムを名乗る「反イスラムの武装勢力」の一掃に立ち上がれる。当然、イスラエルもアラブと和解の為に、過激武装勢力を殲滅する手助けをすることになり、ウイグルを大義名分とする国際正義が中共を叩くことで「世界平和」に一步近づけることが分かってくる。後は、ノーベル平和賞に誰が選ばれるかというだけの問題になる。

東南アジアなどは先祖に中国の血が入っている「中国系」が多いが、華僑は華人と違って中国人に対する愛着も信頼も無い。世界中にいる中国系は十億人を超えるが、中共はそれらを敵に回している現実を知らない。理解している中共幹部でさえ、党という壁には無力であり、もの言えは唇寒しとばかり共産党の現実を面従腹背で過ごしている。現在の序列二位の王岐山でさえ、資産は全てアメリカに預け、自分以外の親族には全員にアメリカ永住権を保証してもらっている。中共には九千万人も党員がいるが、盲目の奴隷でなければ面従腹背の裏切り者しかないのである。

ロシア軍と中国解放軍は毎年のように合同軍事演習をしているが、実は解放軍で選抜されたエリート兵士でもロシア軍の演習には付いてゆけず、毎年何人もも解放軍幹部が演習中に殉職している。ロシア軍では、中共のレベルの低さを笑っているが、軍事演習の経費は全額中共が払う「接待演習」のようなもので、ロシアとしては何ら損害は無いわけだ。

トルコ軍の戦闘能力の高さも有名で、トルコ軍

のゴロツキ部隊が出てくれば中共解放軍の一人っ子部隊などは苦もなく蹴散らされる。そもそも中共の軍事力がミサイルなど飛び道具に傾くのは、兵士の力量が世界最低レベルだと党が理解している証明である。だからロシアとトルコは、中共の飛び道具を封じれば楽々勝てる。その為にアメリカ

香港を沈没させるイギリスの政策

香港返還でイギリスは中共に騙され、世界の笑い者になった。怒っているだけで明確な行動をとれない二流国家だと言われ、EUの対中政策を恨んでいた。それを、愈々仇討ちできる時期となり、アメリカ新大統領へのご祝儀も込めて、中共に厳しい措置を打ち出した。

イギリスは香港の宗主国だった頃から、忠実な香港人には「UK香港人パスポート」を持たせていた。その家族にも申請があればパスポートを発行し、イギリスの二等国民として処遇していた。

このたびイギリス政府は、パスポートを所持する全ての香港人に対して「希望すればイギリス国籍と移住を認める」政策を打ち出し、対象となる数十万人を中共との駆け引き材料にする外交に出た。

香港セントラルの盟主は「香港上海銀行」だが、これは「イングリッシュ銀行」の関連企業であり、既に香港の金融実務はロンドンからの命令でシンガポールに移したそう。すでに香港はアジアの金融センターではなく、中共は高層ビル群が林立するだけの香港を支配したことになる。

イギリス海軍はオーストラリア海軍と同盟しており、シンガポールも同盟国だとして支配し直すように戦略を変更した。我が国海上自衛隊とも新たな同盟関係に入り、東シナ海から南シナ海にかけて軍事演習する権利を主張し始めている。中共海軍は、黙認するか衝突するかを選択しなければならなくなった。

イギリスをここまで本気にさせたのは、EU離脱とドイツのメルケル引退が大きく影響している。海洋覇権国家のプライドが蘇えり、旧敵のドイツに遠慮しなくて良くなり、清朝末期と同様の情勢になってきた中共の沿海部の支配に再び着手する心算になってきたようだ。

現在の我が国防衛当局者の間では、イギリス、オーストラリアと軍事同盟を結ぶことは当然とする議論になっている。「インド太平洋諸国安保」

力は、知らん顔で後方支援として人工衛星から中共ミサイル司令部などの電磁ビームをぶち込んで麻痺させるだろう。

歴史的にアメリカ民主党は戦端を開く役割だが、今回もまた歴史通りに動くことだろう。

の構想まで出ている。アメリカの政権が「大きな政府」を目指している民主党に替わったことも、オバマ元大統領のコントロールが利く政権になったということも影響し、イギリスの世界戦略が動き出したのだ。

トランプ前大統領は先進国の主要勢力から「政権退場」を言い渡され、共和党の側近だった議員たちと今後の身の振り方について頭を抱えている。実質的なトランプの後ろ盾だったラスベガスのカジノ王アデルソンが暗殺されたらしいこともあり、アメリカに於ける「似非ユダヤ」の悪辣な大金持ちは本物のユダヤ人の敵だと認定されていることが明白になったので、これ以上のイスラエルを利用した金儲けはヤバイという話になったようだ。



アデルソンは東部のユダヤマフィアのメンバー出身で、似非ユダヤで立身出世したトランプの父親時代からの仲間だったらしい。世界ユダヤ人会議のエドガー・ブロンフマン議長（写真）が生きていたら、どんな話をしてくれただろう。ブロンフマン議長は公式会議の席で、アメリカで似非ユダヤ行為で金持ちになり、金貸しや不動産で利益を得ている悪い奴らとして、トランプ、リッチー、ティッシューの三人の名前を挙げていたが、その当時はラスベガスはまだイタリアマフィアが支配しており、東部や五大湖でもユダヤ、イタリア、ロシア、アイルランド、中国のマフィアが林立する時代だった。アデルソンたちは後発ということだ。ドナルド・トランプの出世物語と、似非ユダヤたちの出世物語がリンクしているのは偶然ではない。

ロンドンのシティーは世界権力の会議室と呼ばれるが、ヨーロッパ社交界の応接室と呼ばれるパリやローマに所属する中国人たち（周恩来一族、賈慶林一族など）も、習近平の中共を見捨てる決定に賛同したのだろう。イギリス政府の香港政策は、複雑な裏がある話の局面のようだ。

中国の座を狙うインドの、ひたたかな戦略

中国では「一人っ子政策」の後遺症が続き、今も貧乏人男性は結婚できないという現実がある。だから人口も右肩下がり、二〇三〇年には半減に近づくと言われている。日本や韓国以上に高齢化のスピードは速く、中国は超高齢化社会の門をくぐっているのである。

中国共産党が習近平になってから盛んに「愛国心」と言い出しているのは、人民の大半が貧乏から抜け出せずに高齢化し、やがて中国は貧しい老人ばかりの廃墟の大陸になることを恐れて、精神的な締め付けを三億人の裕福な中国人に対して実行するための方便にしたいからなのだ。江沢民時代などは、裕福な中国人だけで中共は成り立つなどと自惚れていたが、世界主要国と呼ばれるようになり国際関係も複雑化し、生き残りを賭けた「一帯一路政策」さえ頓挫したままで動かず、世界の嫌われ者のままで超高齢化し始めたのだ。

その中国の没落と崩壊を最も心待ちにしているのがインドである。国内に「南北問題」「身分制問題」「人種宗教問題」を抱えていても総人口は激増中であり、国民にカウントされていない人口を含めると中国を凌駕している。このままでは、二〇三〇年の段階でインド人口は十五億人を軽く越えるだろう。その頃中国は、人口八億人の貧乏な超高齢化国家に没落していると思われる。



インドは歴史的にイギリス植民地で女王陛下の属国だが、軍事的にはロシアとも近く、政治的にはアメリカや日本と近い。インド人は世界一理解しがたいと言われるが、面白い例を紹介しよう。

大阪船場の繊維問屋に毎日通ってくるインド人がいて、必ず「この生地は半額にならないか」と値切るが、店側に「帰れ」と追い返される。次の日も、その次の日もやって来ては値切る。根負けして店側は半額にしてやる。貧乏で商売熱心なインド人青年だと思っていたら、何と財閥の長男だったという話がある。東京の御徒町の宝石屋に、飛び込みでインド人セールスマンがやって来て、鞆を開くとダイヤモンドがザクザク出て来る。「ユダヤ人よりも安く売るから買ってくれ」と言うらしい。店側はユダヤ人の報復で宝石業界から閉め出されるのが怖いので断るが、インド人のルートだけで商売が成り立つようになるとユダヤ人組織に喧嘩

を売るらしい。まるでヤクザの縄張り荒らしだが、インド人は平気らしい。またコンピュータ関連会社の社長によると、世界の一流技術者のインド人だと紹介された青年は、綿パンにビーチサンダルでやって来たそうである。インド人の本質は解りにくい。見栄や体裁より実利優先は確かなようだ。ちようど韓国人気質とは真逆である。

そのインドが、日本の「自由で開かれたインド太平洋戦略」の主体となることに意欲を燃やしており、アメリカ、オーストラリア、日本、韓国、台湾、ベトナムなどと握手して中国解放軍の海軍勢力を抑え込みながら、ヒマラヤ地域を中国から取り戻すために「チベット解放」を進めてゆくようだ。中央アジアをロシアとトルコが取り戻すのと呼応するように、勝ち組の一角にインドが坐っているのだ。

欧米先進国は大半がキリスト教国家群であり、日本でも中国でもインドでも本質的な仲間とは考えていない。アジア地域で突出して豊かになる国が経済の起爆剤になってもらいたいだけで、自分たちの脅威になるのは許さない。それを理解していなかったのが日本と中国で、一歩下がって見ていたインドはそれを理解している。キリスト教国家群との付き合い方も、女王陛下の下僕として長年積み重ねた実績があるので、日本や中国のように唯我独尊で勘違いした世渡りはしないようだ。

中国が没落し、人口減少で自動的にGDPが右肩下がりになれば、その地位はインドが奪い取ることになる。インドは中国以上に国内問題を抱えているが、それさえ気にしないインド人の性格と、実利優先という解りやすさで同盟国の主要メンバーのし上がる算段だ。

昔、中共はウイグルにソ連が居た頃、小型の核爆弾を使用した疑いがある。その報復をロシア軍は今でも内部で口に出しているそう。そこにインドが同調すれば、ヒマラヤを越えた四川や雲南で核爆発が起こるかも知れない。四川や雲南には解放军の核基地が山中に隠されているので、それを破壊するという名目が成り立つ。ロシアとインドは軍事的に同盟国だという事実を忘れてはならない。

中国共産党は、どのみち「八方塞がり」になっているのだ。上手に負けるといふ兵法を勉強しておかない限り、中共に明日は無いだろう。

東大阪市下の、ある中学校教育現場から《十二》

本紙十一月号において道徳を専門に扱う「日本教科書」という教科書会社をご紹介した。

今回も同じ東大阪市の中学校教育現場に於いて一年生を対象に、日本教科書「道徳」から「サムライ、西洋技術に挑む」を抜粋して、プロジェクトを用いた授業が行なわれた。今回の内容は、江戸時代二百年の鎖国を続けた日本が、明治という時代を迎えるや西洋諸国との積極的交流を開始し、短期間で飛躍的な経済発展を成し遂げた背景を学ぶもの。おもに鹿児島県の「薩摩尚古集成館」(写真下)を取り上げた。集成館事業では、大砲製造施設とその動力を得るために、サムライ(薩摩の旧藩士)たちが稲荷川から七キロの水路を命がけで作りに上げた史実を紹介した。

さらに、過日公開された映画「天外者(てんがらもん)」の主役・五代友厚が薩摩旧藩士であること。折しも五代は「商都大阪」ひいては近代日本経済の基礎を構築した人物なので、これも同時に紹介した。ここから地元東大阪市の技術で打ち上げられた「まいど一号」なども取り上げられた。



■生徒たちの感想から...

・サムライが私たちに残してくれたものは、サムライの知恵だと思います。洋書だけを頼りに大砲を作ろうとした勇気がすごいなと思いました。私だったら作ろうとは思いません。

・サムライがいなかったら、日本は成り立っていなかったのかなと思いました。僕は水車を見たことがないので、一度見てみたいです。

・いつの時代でも努力は大切で、努力をして実が

ならなくてもその努力をヒントに完成させることができるかもしれないです。だから僕も努力をしていきたいです。

・成彬さんは西洋人も日本人も同じ人間なのだから、同じように努力できるというのがすごいとおもいました。

自分ならあきらめてしまおうと思ったからです。アニメの、黒船が浮かぶ理由は、蒸気が出ているからというのは初めて知ったので、なるほど...と思いました。自分も挑戦することは大切だと思います。

・昔の日本のサムライは日本を変えるためにすごく頑張ってくれたから、今の平和な日本があるんだなと思いました。そんな日本を大切にしようと思いました。

・いろんな人たちが(サムライ)を知れてよかったのと、昔の人達が大阪に(たとえば回転寿司)初めていろいろ築いてくれて大阪に住んでいることに自信がもてたのでよかったです。時間があれば調べてみようと思った。

・昔の偉人たちがいなければ、今の私たちやこの地域はないんだなと思いました。先人の方々が築いてきた歴史を大事にしつつも、また新たな時代を私たちが築いていかないとけないのかなと思います。先人の志にふれて誇りを持てるということとは、先人たちにとつてもうれしいことなんだと思います。

・サムライといっても最初は戦国時代の人とかを想像していたけど、幕末の人もかっこよくて良いなと思いました。東大阪についてもっと知りたくなりました。(以下略)

寄稿 子どもを育てること

「兵庫通信」代表 村上 学

先日、兵庫フオーラムに於いて甲南女子大学の稲垣由子名誉教授のお話を聞く機会を得た。稲垣教授は発達行動小児科学の我が国に於ける権威であり、子どもをどうやって育てるか、子どもはどうやって育つかという問題を研究している専門家である。自身も小児科医として臨床していた経験から、一般的な「机学問」とは一線を画している。まず我が国で親から虐待されて死亡する子どもの数は、厚労省の発表だけで年間一二〇人を超えているそうだ。表に出ていない者を含めれば、そ

の数はもっと多いだろう。この数字は、実は日本の家族の在り方にとって重大な問題なのである。進歩した社会で教養レベルも高く、先進国であるはずの日本で起こっている我が子の虐待とは、一体どこに問題があるのか。

稲垣教授によれば、子どもは自然に自分の周囲の環境に合わせてやうとするものらしい。だから「子育て支援」よりも「子どもが自ら育つことの支援」を政治は考えるべきだという。



ものであり、子どもの発達障害に対する考え方も未発達らしい。子どもの発達障害に解決は無く、親子の現状がより良くなるだけの改善しか望むべきでないものだろう。

教授によれば、子どもは社会的存在となつて人間になるので、その為に親の子育てと子ども自身の自律的育ちが重要になって来るものだという。ヒトとは、哺乳動物の一種でしかないことを認識しておかねばならない。

生物学的、遺伝学的に子どもを見る必要性と、社会的な存在になることが子ども自身の目標となることを考える必要がある。その為には「私は自分で育つた」と自信を持たせてくれる大人の存在が欠かせないそう。子どもは、自身が育てられたように育つ傾向があり、育児の連鎖は、虐待があれば次の虐待に繋がる連鎖を持っている。

子どもが自分で育つことを考える場合に、児童相談所が虐待する親から親権を取り上げるといふ懲罰的処置を取るが、子ども自身が社会的な存在として自分で育つ能力を認めて応援しているかどうかが重要だそう。子どもは足りないものを補おうと求める本能があり、物理的環境・人的環境・自然環境を保証してくれることを望んでいる。充足していたか不足していたかは、経験としていつまでも残っているそう。

最近のゲームなどのバーチャルリアリティの蔓延に対しても、多すぎる刺激は子どもの「脳成熟」を混乱させるだけで、成長発達段階の子どもの脳がどうなるか、百年後に後悔することになるかもしれない。ただバーチャルリアリティを与え過ぎると、子どもの脳は工夫することが出来なくなってしまう。

社会的・文化的・慣習的な社会制度が、子どもの成長に影響を与えていることは間違いないが、「叩いて子どもを育てる」という伝統的な慣習のある所に、物理的な暴力を否定するというだけの対応しかしていない現状は、余りにも考えが浅いと言わざるを得ない。例えば、アフリカなどで「子ども兵」や「子ども売春」「子ども労働者」といった事実に対して、国連が一九八九年に「子どもの権利条約」を提唱し、日本も一九九四年に批准したことがある。世界の現状を一括で見るとは間違っているが、日本は子どもを育てることに臆病になりすぎているようだ。自国の問題を明確に出ないから、真面目に子どもの問題に対処できないのである。



日本では、虐待されている子どもを保護しても、自立していない子どもは「帰りたい」と言うそうである。あんな親でも親は親ということになるが、つまり子どもの精神性の発達段階をよく見る必要があるということだ。子ども自身が、自分が出来ることを理解していれば、その子どもが所属している社会に自分の能力を提供したいと思うものらしいが、その所属する社会をどのように評価するかは子ども自身ではない。外部の大人が判断することや、その子どもを問題視することは良い方に働くのだろうか。

また子どもを見る時に、生活機能不全であれば「疾病概念」で見るとだが、社会参加の意思を持っている場合には「健康概念」で見なければならぬそう。ダーウィンは進化論の中で「環境に適応する種だけが生き残る」と言ったが、子どもは周囲の環境に適応しようと必死になるものなのだ。自分の生命維持が本能であり、子どもがクリエティブな社会を創造しようなどとは考えていない。安心で安全な空間を求めて、子どもは種の本能で生きているのだ。

昨今流行の「ひきこもり」も同様で、安心・安全・食糧に困らないから家から出ないのである。ここに居れば生存は保証されるというのは、最低限の生物本能である。生物社会では、生まれて死ぬという明確な「始まりと終わり」がある。生と死の間にある時間を生涯と呼び重要視する。

さて、発達障害というのは「社会適応困難者」を指しているが、運動面・認知面・情緒面でどの程度を障害と言うかは難しいところだそう。社会に適応できるかどうかで計る以外に方法は無さそうだが、それは「発達特性の問題」なのか「逆境的環境の問題」なのかは余り考えられていないようだ。

我が国では、生まれ育った家族を「固定家族」と呼び、結婚して作った家族を「創造家族」と呼んでいる。固定家族の意識が過剰であったり、また不足していたりすると、創造家族は壊れ易いと言われている。子どもが大人になり、また子どもを育てるという環境の中で、子どもが自分で育っていくという自律性を、もっと重要視するべきかも知れない。

稲垣教授のお話によって、日本社会だけでなく日本政治が「大人中心」で、子どもには「与える」「授ける」という意識を強く持ち過ぎていたことを認識させられた。